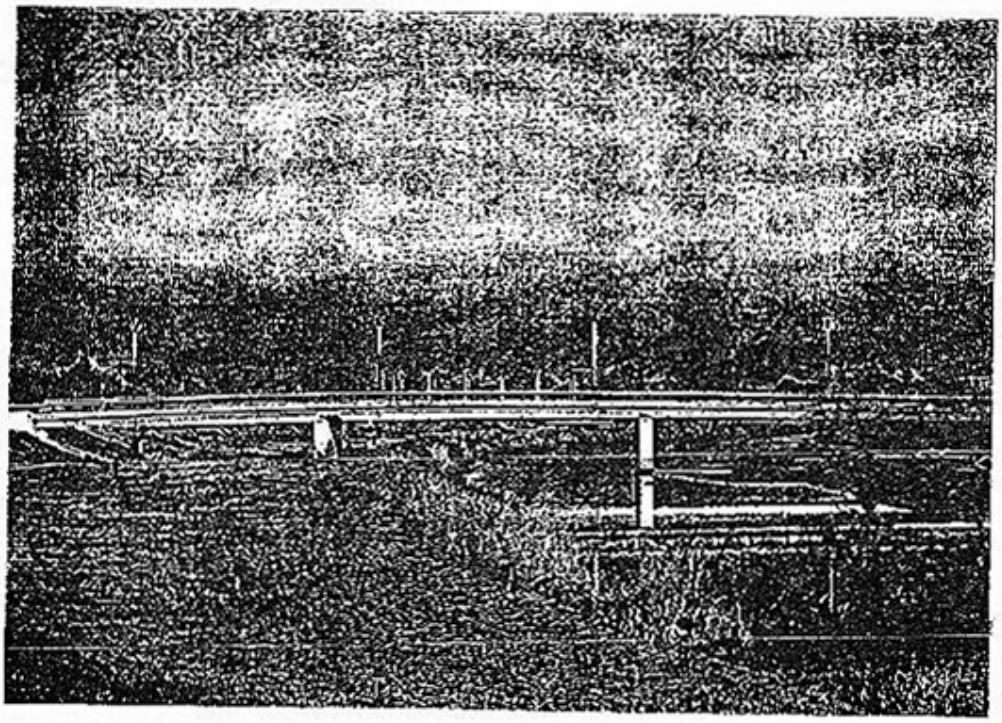
増林からの旅路

江戸時代の長旅



2001

増林の歴史を考える

其のⅢ

増林からの旅路

現在、我が国の国内観光客の宿泊総数は年間１億９３００万人、日本人家庭一人当り１．５３回、宿泊日数平均２．４７泊（平成十三年度観光白書）に達する。

交通機関の発達とそれに伴なう宿泊施設の設備は、旅行を気軽なものにした。

行き先の目的に合わせて、車やバス,鉄道,飛行機と安易に利用する機会が増えたのがその要因である。

遠き昔から日本人は旅好きであったと思われる。

Ⅰ.江戸時代の長期休暇

経済的にゆとりが出来て来た江戸時代中期頃には、農閑期を利用して寺社参詣を目的とする旅が急速に増えてきました。

庶民の間では、９０日～１００日かけた伊勢参りなど文政年間（１８３０）には、５ヶ月間に日本の人口の 1/6～1/7 の人々が伊勢に押しかけたとも言われる。

年々増加する旅人のために旅行ガイドブックも数多く登場するようになった。

そのひとつに文化７年（１８１０）八隅蘆庵が著した「旅行用心集」には、出発前の準備から旅先での心得に至るまで細かく記されている。五街道の完成による天馬旅籠木賃宿と旅人の受入体制が整ってきた。

十辺舎一九著「東海道膝栗毛」の滑稽本では、神田八丁堀に住む弥次郎兵衛と喜多八という２人の男が東海道を上って伊勢参宮し、京・大阪を見物するという道中記が江戸町民の旅の書のベストセラーとなり、信仰の旅から娯楽の旅へと移り変わって行った。

旅の途中での買い物には、種を買い帰宅してから蒔くとか農業の方法も旅人同志が教え合い、こういう農具があるなどといった勉強や情報交換も出来たことであろう。

当地の人達の書き記した旅行集なるものは今まで見つかっていないが、この時代の旅行について増林地域に建っている巡礼塔からは読み取ることが出来る。

地域内の主な巡礼塔

塔の名称	塔の建立年代	設置場所
百箇所等の巡礼塔	享保 16 年(1731)12 月	(1)勝林寺境内
百八十八箇所の巡礼塔	天明 8 年(1788)6 月	真正寺跡地
百箇所の巡礼塔	寛政 5 年(1793)3 月	虚空蔵堂跡
出羽三山百箇所の巡礼塔	文化 7 年(1810)12 月	(2)清涼院墓地
百八十八箇所の巡礼塔	文化 12 年(1815)8 月	薬師堂墓地

地蔵菩薩像付き百箇所等巡礼塔

所在地　増林・勝林寺境内

石塔型式　丸彫（北西向き・高さは高）

年　号　享保十六年（一七三一）

〔左側面〕　西国　秩父　坂東　札所
　　冨士山　湯殿山　立山
　　右諸願成就之供養為也

〔正面〕

（地蔵菩薩座像）

為五穀成熟地蔵菩薩

為三界萬霊六親眷属

〔右側面〕

享保十六辛亥年十一月廿四日

造立主磯氏

（2）

出羽三山及び百箇所巡礼塔

所在地　増林・清涼院墓地

石塔型式　頭部山状角型（東南東向き・高さは高）

年　号　文化七年（一八一〇）

〔左側面〕

増林村　鈴木甚右衛門　今井清右衛門　中村孫右衛門
世話人　中野平兵衛　同　六右衛門　会田惣七
　　小島平兵衛　同　幸助　生誉浄心法師
　　須賀市良兵ヱ　深谷重右衛門　□本五良兵衛
　　榎本才兵ヱ　中村林庵　須賀長右衛門
　　鈴木勘右衛門　岡安又兵衛　渡辺氏八
　　中野源蔵　同　勝右衛門　鈴木権実橋
　　関根孫七　鈴木岡右衛門

文化七庚午年

〔正面〕

月山　坂東　天下泰平

湯殿山　西国　奉順禮百番供養塔

羽黒山　秩父　国土安穏

〔右側面〕

大吉村　藤塚村
世話人　染谷長右衛門　鈴木利左衛門　遠藤七良治
　　同　久右衛門　山田小左衛門　中井村
十二月吉日　中山佐兵衛　松伏村　杉村與右ヱ門
　　元木五良兵衛　鈴木彦左衛門　向畑村
　　加藤久兵衛　長　小左衛門　鈴木栄蔵
大沢下宿　赤岩村　同上文七
　　中山五良左衛門　染谷兵右衛門　川崎村
　　鈴木佐七

〔裏面〕

増林村
中野浅右ヱ門
関根七右衛門
中村武助
岡安寿右衛門
同　清右衛門
戸張長四郎
平野茂吉
戸張弥右衛門
向畑村
松崎五右衛門

１－１．霊場巡り

わが国で巡礼がなお盛んに行われているのは、西国坂東秩父の百観音巡拝や弘法大師の信者による四国八十八ヶ所巡りなどが代表的なものだ。

① 坂東三十三ヶ所

板東の礼所は、鎌倉を出発点に相模,武蔵,上野,下野,常陸,上総,下総,安房をめぐるおよそ１３６０キロの道程で、歩いて４・５０日を費やした。今日バスなら７泊８日の旅程である。

② 秩父三十四ヶ所

現在の秩父郡や市内にある寺院で江戸からは、川越,熊谷,吾野を経るコースが主に利用された。開張は午の年に行われたが、江戸からの巡礼が多くなり、その要望もあって江戸への出開張も行われるようになった。

③ 西国三十三ヶ所

那知をはじめに紀伊,和泉,河内,大和,山城,丹波,摂津,播磨,丹波,近江を巡って美濃の谷汲で終える。観世音は三十三の身に姿をあらわし、悩める人を救うという観音経の諸説に基づき三十三ヶ所の霊場が設けられた。

④ 四国八十八ヶ所

四国八十八ヶ所は弘仁６年（８１５）弘法大師４２歳の時に開創されたと伝えられている。また、大師入定後高弟真済がその遺跡を遍歴したのが始まりともいう。

そして八十八ヶ所の霊場が固定したのは室町時代末期から江戸時代初期にかけてといわれている。

八十八という数字は煩悩の由来するとか「米」の字を分解したことによるとか、あるいは男４２,女３３,子供１３の厄年に合せたものともいう。

その道程およそ３６０余里（そのころいわれた里程１４４０キロ）４０から６０日近い日数を伴なう長路の旅である。車でめぐっても１０日はかかるのである。

⑤ 出羽三山

出羽三山は、湯殿山,月山,羽黒山の総称として出羽三山という。この山は古くから関東・東北を通じての山岳信仰の一大中心地である。今も参道の両側に宿坊もあり多くの人達を集成している。

２－２　　増林地域外であるが、古利根川を隔て松伏町上赤岩８２６２、現在ふれあい橋たもとの須賀秀男氏所有の稲荷神社御神体について参考までに記すと

本宮

表書　　稲荷社安鎮之證書愛染寺

正一位稲荷大明神安鎮之寺

右雖為本宮奥秘依格別懇願授奥之記

　　絲永慎莫怠慢仮鎧書如件

　　日本稲荷総本宮

　　愛　染　寺

嘉永五年　閏二月二十辰　　晃順

武州葛飾郡松伏村　　須賀忠左衛門殿

伊勢参りの帰途京都伏見稲荷のお墨付きのお札を大事に持ち帰り、屋敷内に社を建て御神体としたことが分かる。増林にも同様のお札があるというが今だ見るに至らず。しかしこのように江戸時代当地域と近隣の多くの人達が遠くへ旅をしていたことが垣間見ることが出来るのである。

尚、愛染寺は明治期の廃仏毀釈により廃寺となり稲荷神社のみ現存している。

Ⅱ．江戸時代の徒歩の旅

２－１．一日で歩ける距離

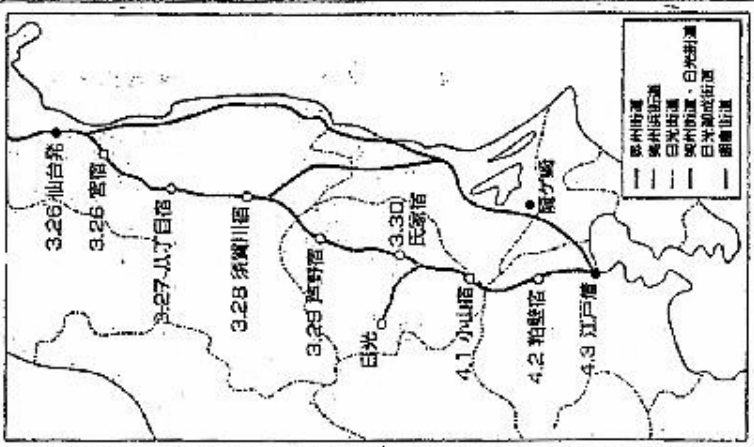
① 仙台藩の参勤交代

江戸幕府の大名対策に親藩･譜代の大名を含む諸大名の妻子を江戸に在住させる江戸在府制と参勤交代の制度があった。諸大名は恭順の意を表し、忠節を誓う目的で自分の肉親特に正室や嫡子を人質として江戸に送りこむようになり、大名自身も家臣団を伴なって将軍が居住する江戸と領国である国元とを行き来をするようになった。当時は徒歩による移動が原則で持ち歩く荷物についても江戸後期には大八車を使用した可能性もあるが、基本的には馬に積み歩くのがせいぜいであった。仙台･江戸間は９２里余現在の距離で３６０キロ、この距離を７泊８日ないし８泊９日で移動した。　１日平均１２～１５里（５０キロ前後）の道のりを移動した事になる。しかもこれが数百人から多いときには二,三千人の供揃いで進むのであるから大変なスケジュールとなる。

①1701年(元禄14)出府時

日付	時刻	現在時刻	発着	場所	備考
3月26日	辰下刻	8:30	発	山台城	参拝
	午刻	12:00	着	柴松原宿営	昼休
	未上刻	13:30	発	岩沼古内主膳在所	
	酉下刻	18:30	着	同所	宿泊
				宮	
3月27日	卯刻	6:00	発	同所	朝食
	辰上刻	7:30	着	岩石城	
	巳刻	10:00	発	同所	昼休
	未下刻	14:30	着	森折	
	申刻	16:00	発	同所	宿泊
	戌上刻	19:30	着	八丁目	
3月28日	巳上刻	9:30	発	同所	昼休
	午刻	12:00	着	本宮	
	未上刻	13:30	発	同所	参拝
				諸羽明神足大明神	
				須賀川	宿泊
	酉刻	18:00	着		
3月29日	辰刻	8:00	発	同所	昼休
	午刻	12:00	着	白河	
	申上刻	15:30	発	同所	参拝
				須賀川神社	宿泊
	戌上刻	19:30	着	芦野	
3月30日	巳上刻	9:30	発	同所	昼休
	午刻	12:00	着	太田原	
	未刻	14:00	発	同所	
	戌刻	20:00	着	氏家	宿泊
4月1日	午上刻	11:30	発	同所	昼休
	未刻	14:00	着	宇都宮	
	未刻	14:00	発	同所	
	戌上刻	21:30	着	小山	宿泊
4月2日	辰下刻	8:30	発	同所	昼休
	未刻	14:00	着	栗橋	
	申上刻	15:30	発	同所	宿泊
	戌刻	20:00	着	粕壁	
4月3日	辰上刻	7:30	発	同所	昼休
	巳下刻	10:30	着	幸嶋	
	未上刻	13:30	発	同所	小休憩
			着	平塚	
	申刻	16:00	着	江戸屋敷	

※「治家記録」により作成
※現在時刻はおよその時間を示した



※数字は左表①の日付と対応している
仙台藩の参勤交代の経路

仙台四代目藩主綱村１７０１年（元禄１４年）江戸出府を図版に示した。

通常１日１２里から１５里の日程を早いときで卯刻（朝６時頃）遅くとも辰刻（朝８時頃）には出発し途中一度の昼食の為の休止はあるものの、早くて未刻（１４時頃）遅いときで戌刻（２０時頃）まで行軍し宿泊するという強行スケジュールであった。

② 吉兵衛の旅日記

福島県耶麻郡高郷村に残る道中記は、会津坂下町より西に位置する山間の村でかつては越後街道の脇街道として越後と会津を結び物資の往来が激しかった。村の中央には阿賀川が流れている。現在高郷村にお住まいの小林春次（８８歳）さんの先祖吉兵衛の旅の記録からは、文政１３年（１８３０）正月９日、吉兵衛は仲間８人と供に農閑期を利用して高郷村から７００キロメートル先の伊勢へと旅に出かけている。草鞋わら鞋の寒さに負けない身支度で出発。

正月１１日　出発より２日目、赤井弐里、大ふ天気故往来不成候。一行は大雪に阻まれ、足止めを余儀なくされた。

正月１５日　旅立ちより６日後、日光に到着。日光東照宮を見物。

正月２１日　江戸に入る。神田明神・浅草観音などの江戸の名所旧跡巡り。その案内銭２５０文、芝居見物三幕１１０文、その他案内料・拝観料。

正月２７日　天下の難所として知られる箱根山にさしかかる。幕府はここ箱根をはじめ全国５３ヶ所の関を設けていた。旅人は大家や名主などが発行した通行手形を見せなければ関所を通る事が出来なかった。

正月２８日　京屋太郎佐衛門家に宿泊。家賃１７０文　此の宿悪き所にて泊まる不可候。

正月２９日　大井川の渡賃２６６文を払って大井川を越す。東海道を西へ、連日６里～７里およそ３０キロ近い距離を歩いていた。

２月９日　出発から１ヶ月後、伊勢山田に到着。伊勢神宮の参詣を果たしてその後西国三十三ヶ所観音霊所を巡礼して京・大阪を見物、更に四国金毘羅宮まで足を運んでいる。

３月９日　吉兵衛一行は閏３月９日故郷高郷村に帰り着く。

この間宿泊代１１貫５２９文。船渡し銭と交通費１貫８３文、供養料山役銭などといった拝観料４貫４６０文。

三ヶ月に及んだ吉兵衛の大旅行の費用は、占めて銭１８貫４３９文にのぼった。内訳比率にしてみると、旅籠代木賃宿代などの宿泊費６２パーセント。交通費一割の支出となっている。意外と大きな比率を占めたのが拝観料で総支出の４分の１に当る２４パーセントであった。百文で米１升５合が買えたという当時の物価を考えると庶民にとって旅は相当な支出と言うことになる。

③ 現代人の徒歩旅行

植村直巳(1941～84?)登山家・冒険家が北海道の稚内から鹿児島まで日本列島３千キロメートルを歩いた。１９７１年8月３０日～１０月２０日まで５２日間の旅です。

南極横断の距離がちょうど3千キロ。その３千キロをとにかく歩いてみるという発想で

日本海沿岸を歩いたのです。

平均して一日６０キロ歩いた事になる。最初は張り切って１日７３キロも歩き、翌日はマメをつくってダウン。本州に入ってからは一日６０キロ以上のスピードで歩く様になったという。

必ずしもずっと体調が良かったわけではなく、右足に出来たマメをかばって歩くうちに左足が痛くもなり、体のどこか気になるところがあり、決して快適に歩き通したのではない。

朝５時頃から夜の８時・９時まで歩いて１日６０キロ以上であったという。

Ⅲ.短期休暇

現在もわずかに残る参詣の講や遊山、今日では交通機関の発達によって日帰りできるコースが増えてきたが、交通・乗り物を利用しない時代は、多くは徒歩での旅行であった。

成田山(千葉県)・筑波山(茨城県)・御岳山(みたけさん東京都)・三峰山(埼玉県)・榛名山(群馬県)・古峰山(栃木県)・大山阿夫利神社(神奈川県)・戸隠(長野県)・秋葉山(静岡県)・富士山・日光・御岳山(おんたけさん長野県)等で、今でもこれらの講はかすかに続いている。

ここで当地で最も手近な成田山について記すと、当地から成田山まで十六里と古くから言い伝えられている。

旅路は古利根川を渡し舟で松伏側に越し、東葛西堀の橋を渡って庄内古川と江戸川を渡し舟で越し、野田から流山方向へ向かい柏・我孫子経由成田山へと行く方法と、平方新田村(現吉川市)から雨宿(あまや)の渡しから舟で下り我孫子で舟を上がり、そこから徒歩で成田山に向かうコースに分かれていた。

成田に着いた日は宿坊で一泊する者もいたり、日帰りの者もいた。

徒歩での一日の歩く距離について考えるに、明治生まれの人に早走の人が結構いたことが分かる。

酒屋でコップ酒をぐい呑みして足早に帰る姿や農作業で畑に向かう姿は、到底私達には追いつかない早さであった。

伝説として残る話に、増林の長浦三氏(明治２５年生・昭和３２年４月没)が昭和期に入っても度々成田山詣をしている。

冬の農閑期に草鞋を五足用意して、足袋・草鞋がけ・弁当持ちで出かけた。予備の草鞋は途中で切れたら水に浸しておいて履き替る。夕方の五時頃増林の地を出発、翌日の朝方７～８時に成田に着き、朝の祈祷に間に合わしたという。私も知る限り、この人は早足であった。

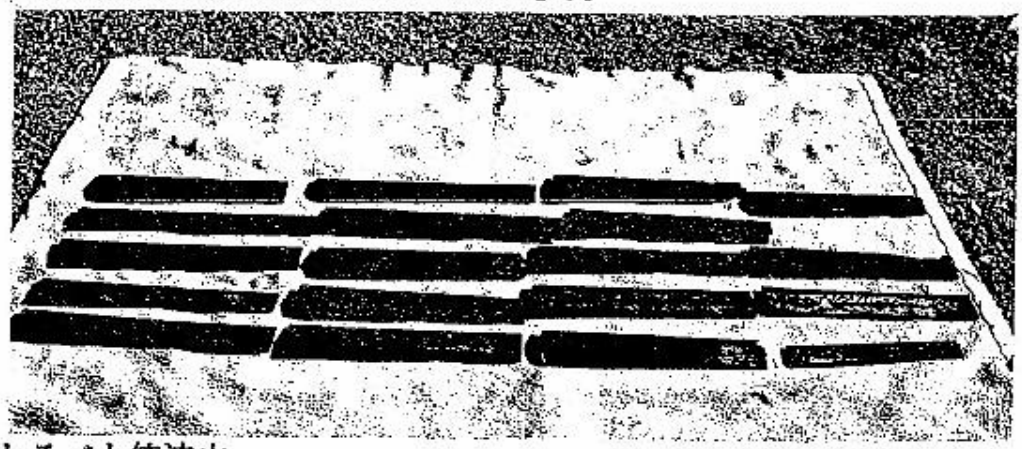
時代は変わって大正時代生まれの人々になると徒歩ではなく殆どの人が自転車での旅へと変わって行った。

増森　小島康男家の護摩札

小島家は代々、農業を営み農閑余業として「さらし業」を営んでいた。毎年二月(旧正月)成田山詣に出かけている。成田山護摩札が十八枚・大相模不動尊の護摩札七枚が現存する。

成田山の護摩札に載せられている年号には安政・万延・文久・慶応と毎年二月に成田山から譲り受けている。なかには年号の記載のない札もあり、いつ頃から定期的に成田山に行く様になったかは定かではない。

増林地域内には成田山文字塔が各所に点在して現在も残っている事から古くから当地の人々が成田山詣をしていたことが伺い知ることができる。



Ⅳ. 道しるべと筑波山

①道路の分岐点にあってそれぞれの道の進む方向・目的地や距離などを記し、旅行者の便に供したもので、当地にあるものは近世に設けられている。

江戸時代中頃以降、寺子屋で学ぶ子供たちが増え、都市部や農村でも庶民が教育を受け、手習い、読み書きの能力の向上により道しるべが読めるようになったのに伴ない、急激に増加していく。

唐申塔・供養塔・馬頭観音等の石仏や石造物に道しるべを兼ねさせた。民衆が自ら設けたものがほとんどである。

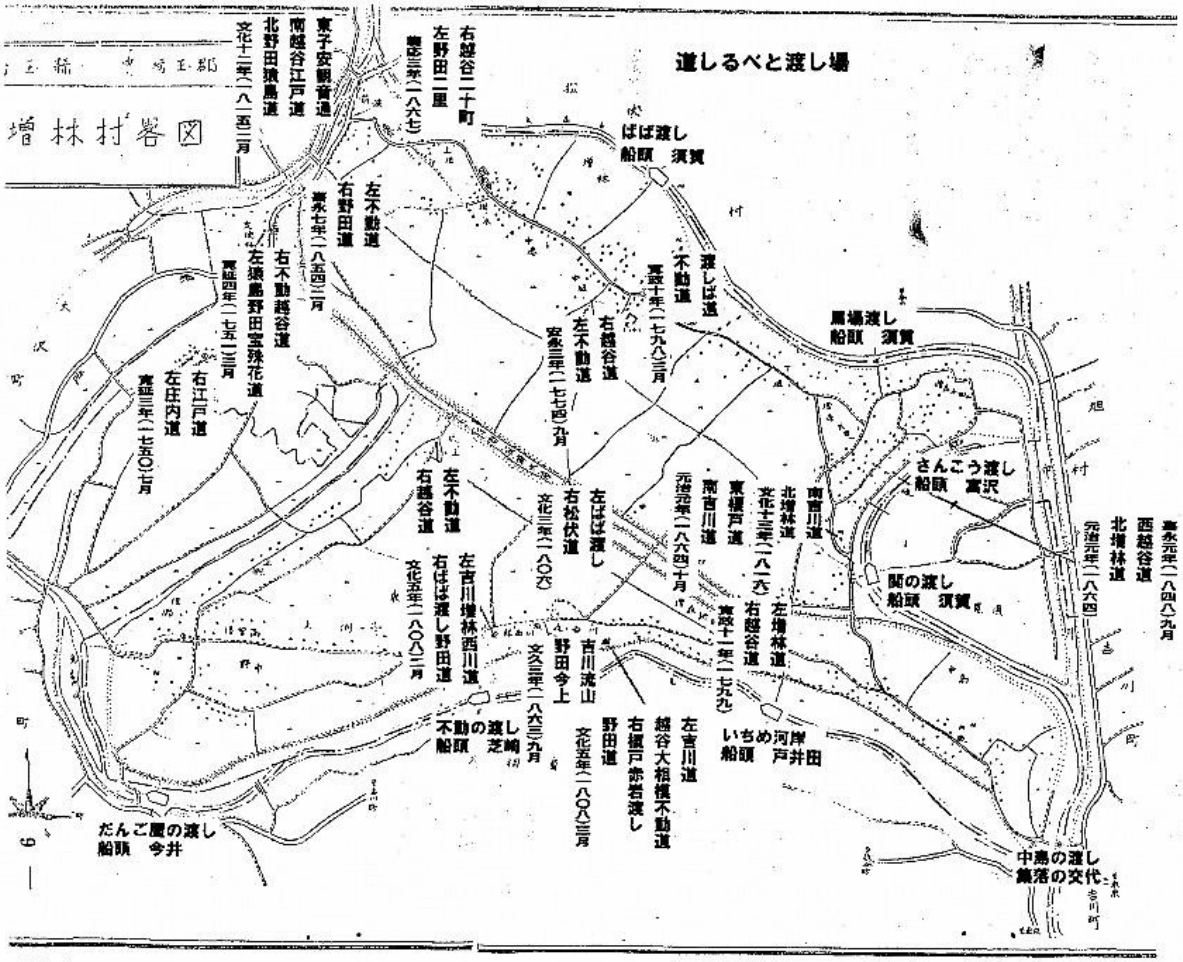
増林地区で最古の道しるべは、花田西円寺にある寛延三年(１７５０)でその後、安永・寛政・文化時代へとなっている。

そこに刻まれている主な道先の方向は「越谷江戸道」「野田猿島道」「庄内道」「宝殊花道」「不動道」「吉川道」「ばば渡し」「赤岩渡し」「増林道」「吉川流山道」「野田今上道」などとなる。遠方を指す道しるべは江戸・野田猿島・吉川流山道などである。

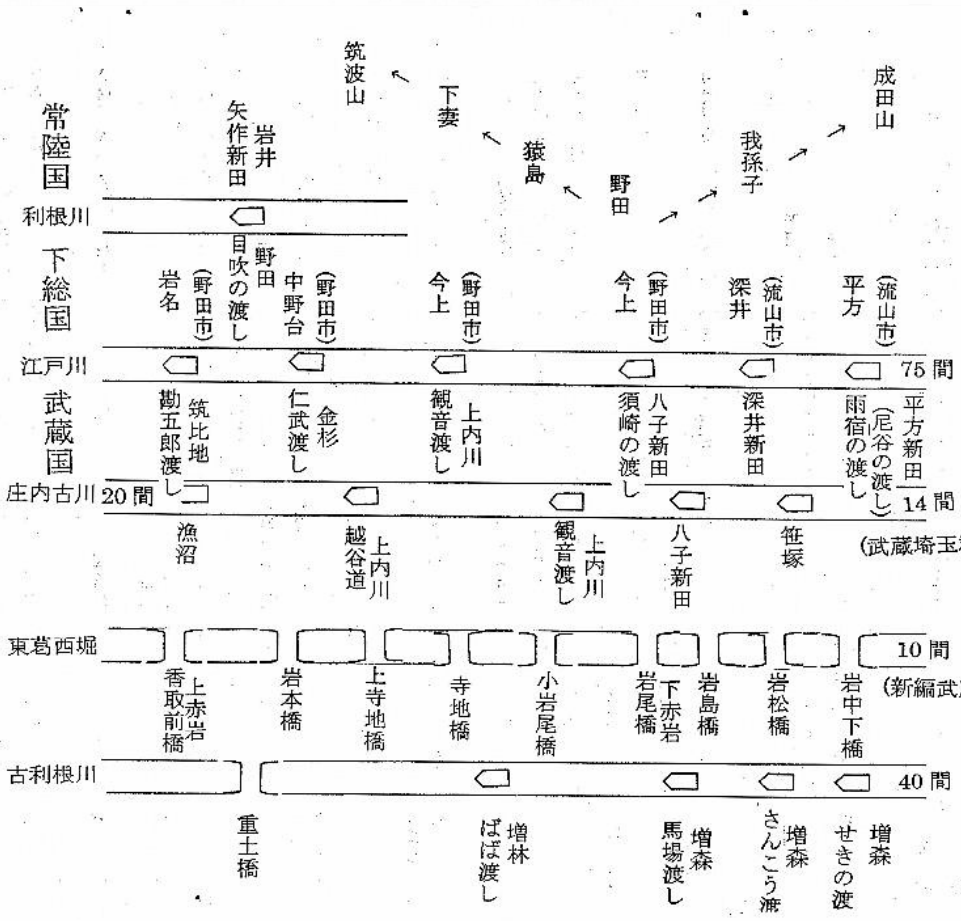
②野田猿島道の先は筑波山であったと思われる。庄内猿島道は現在の県道野田越谷線で、当地からは松伏野田を経て、目吹の渡しで茨城県に入るのである。岩井市から下妻道を通過して筑波山に向かう。馬鹿三里という言葉が残っているが、筑波山が見えてもなかなか着かないので、後(あと)三里、後三里と掛け声を掛け合いながら歩いたと言う。

筑波山は古来関東の名山として西の富士と並び称された。

頂上は男体(８７０メートル)と女体(８７６メートル)の二峰に分かれる。それぞれに筑波神社の奥院の祠があり、古くから参拝者が多かった。関東平野が一望出来るので現在も多くのハイカー達が訪れている。



江戸時代からの通過道
旅路は、先ず増林側から渡し舟で対岸の赤岩に上り、
庄内古川・江戸川を経て、
成田山コースと筑波コースに
分かれて徒歩旅行した。



※観音渡し(越し)とは、江戸川と
庄内古川と隣り合せに川が流れている、
二つの川を渡る(観音開き)

Ⅴ．橋

橋は人と人との交流の増進となり、物資の輸送を安易にするものである。しかし、建設にあたっては多額の費用がかかり、建設後の維持管理も大変なものである。

近年までほとんどの橋は木造で、水腐や洪水・流草木などによる破損が多かった。

Ⅴ－１．江戸時代の橋の管理

御入用橋…幕府が管理していた橋のこと。通称大橋という。

組合橋…武家・寺・町内などで組合をつくり維持管理していた。

一本橋…武家や町人など個人が維持管理していた橋。

千住大橋…隅田川に架かる橋で日光街道(奥州街道・国道四号)が通り、荒川区と足立区を結ぶ古称大橋と言う。

文禄３年(１５９４)伊奈忠次が普請奉行として創架。徳川氏関東入国後隅田川に架設された最初の橋。

創架に際しては奥州街道を往来する伊達政宗が資材を調達した。橋枕には水腐れに最も強い犬槙の巨材を集めたという。この橋は幾度か改架されたが、創架以来明治１８年７月の洪水の時まで一度も流失しなかった。

前波土橋…逆川に架かる橋。増林村普請帳　嘉永５年(１８５２)によれば、山中遂げりとなっている。

このことは、勝林寺末寺の清涼院が当時大吉側に田圃を多く所有していたことと、信者が川向いの大沢・藤塚・大吉・北川崎・向畑などの地域からも来ていた事による。これは百箇所巡礼塔に刻まれた村々の名称から読み取れる。

勝林寺が橋の維持管理をしていた。

中世の僧侶の架橋は仏典がこれを善行随一としてすすめ、福田思想(善き行為の種子を蒔いて功徳の収穫を得る田地と言う意味)によるが、民衆の苦渋を無視しがたい宗教人としての自覚による。

荒川橋…後の中島橋と名称が変更となるが、最初は賃取橋であった。中島の有志によって架けられた。

近隣では徳江橋が賃取橋であった。中川を挟んで吉川と大相模の間に架かる橋で徳江忠次郎の私費によって明治７年に架けられた。徳江氏は橋のたもとの豪商であった。

荒川橋の完成は昭和５年５月であるが、建設に当っては中島地区在住の杉山末吉氏を代表者として鈴木吉五郎・内野清衛門・内野勝太郎共同出資で総事業費９百

円であった。昭和５年当時の米価は一俵(６０キロ)が１０円２４銭であり、約88俵分に相当する金額だった。資材の調達は深川の材木市場から買い付け筏を組み蒸気船で中川を引っ張って来たという。

県の指導のもとで架橋され、三寸板の木橋が完成となる。橋の完成後、橋の北詰に小屋を作って四人が交代で小屋に待機してこの橋の渡し賃を徴収した。渡し賃は片道二銭・往復三銭・荷車五銭であったという。その後、補修費が重み昭和 13 年頃県に移管したという。

この記述内容に関しては、出資者の子孫にあたる内野正一氏(大正５年生８５歳)・杉山邦三郎氏(大正１２年１２月２０日生７８歳)のご協力を得ました。

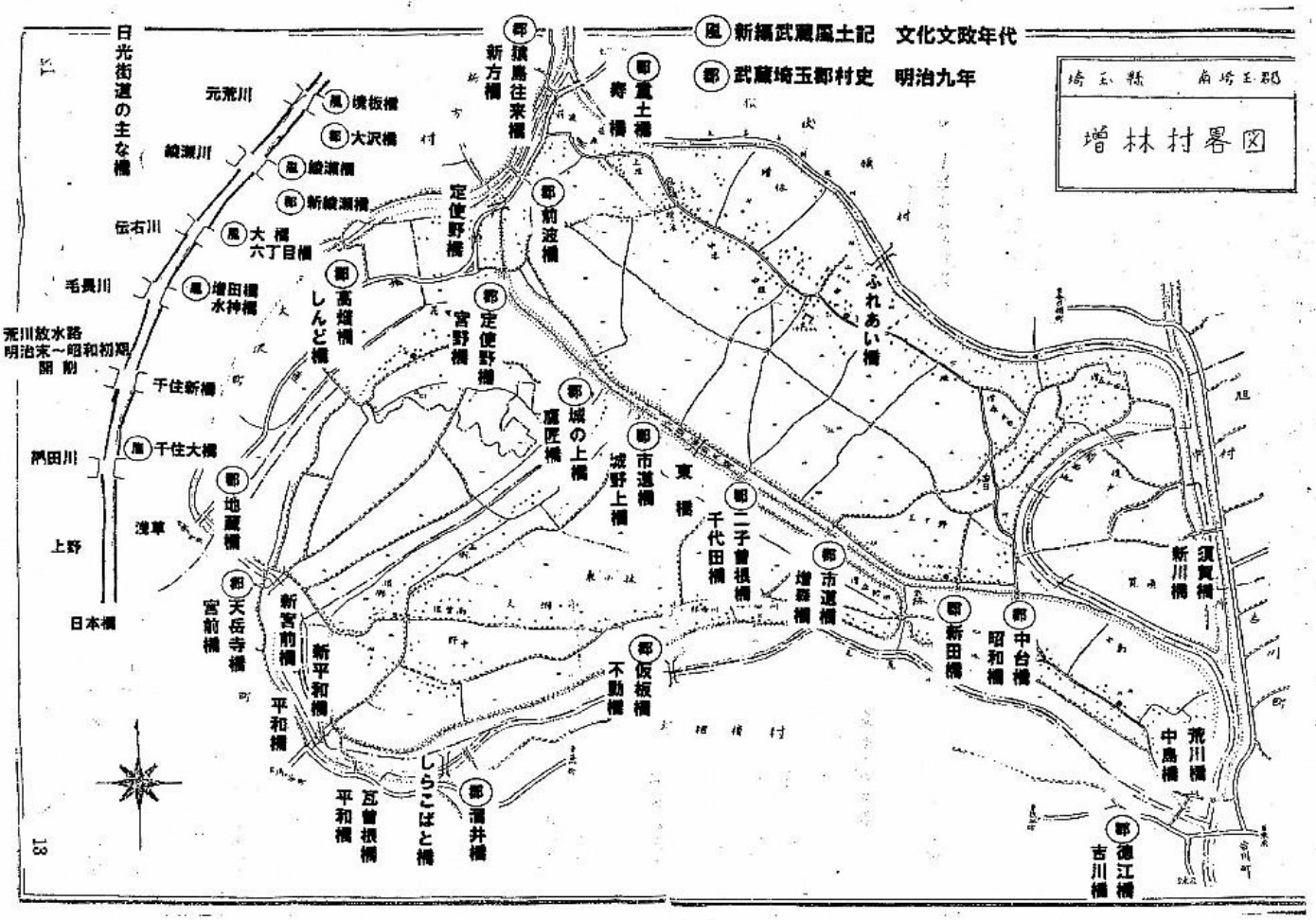
ふれあい橋…この橋は、増林住人にとっては最も新しく架橋された橋で、今後の社会環境と生活に大きくかかわっていくであろう橋の一つである。

越谷市と松伏町境を流れる古利根川に架けられた「ふれあい橋」越谷駅から増林・上赤岩・ゆめみ野を経て千葉県の野田へと通ずる。この架橋に先立ち、昭和５３年２月地元から市に対し、請願書と趣意書が提出されている。

大字増林土木委員長須賀徳雄氏他諸団体の役員連盟からなるもので、その後になって都市計画道路になった。

請願から１６年後の平成６年９月３０日に工事安全祈願祭後の着工となり、平成１１年１０月１日の開通となった。

全延長１０４.７メートル。幅員１６.８メートル。総工費９億７千万円。



旧増林村の人々が利用してきた橋

武蔵埼玉郡村史　明治九年一月一日現在

川名	橋名	造製	長さ	幅	現在の橋名	備考
新方川	定使野橋	土橋	六間三尺	九尺	宮野橋	江戸時代は地蔵堂前橋
〃	城野上橋	〃	〃	〃	鷹城橋	
〃	市道橋	〃	六間	〃	城野上橋	
〃	二子曽根橋	〃	六間三尺	〃	千代田橋	
〃	市道橋	〃	八間	〃	増森橋	
〃	新田橋	木製	〃	〃	新田橋	
〃	中台橋	土橋	〃	〃	昭和橋	
古利根川	重土橋	〃	十間	三間	大正十年廃止	水門と一体となっていた橋
逆川	猿島往来橋	〃	十三間	九尺	新方橋	
〃	前波橋	〃	九間三尺	〃		建設中
〃	高畑橋	〃	九間	六尺	しんど橋	東へ四十M移設
〃	地蔵橋	〃	八間	九尺	地蔵橋	
元荒川	大沢橋	木製	十八間	三間	大沢橋	
〃	天岳寺前橋	土橋	十二間三尺	二間	宮前橋	平成十二年廃棄
〃	溜井橋	〃	十二間	九尺	溜井橋	平成八年廃棄
〃	仮橋	木製	二十六間	七尺		不動様縁日一ヵ月間架け舟を横に並べた浮橋
中川	徳江橋	〃	八十五間	二間	吉川橋	賃取橋、徳江忠次郎が架けた

江戸に向って架かる橋、奥州街道(日光街道)道幅四間

新編武蔵風土記稿　文化文政年代

元荒川	境板橋	板橋	三十四間		大沢橋
綾瀬川	大橋	土橋	十二間三尺	二間一尺	綾瀬橋	江戸時代幕府が架けた橋
伝右川	〃	板橋	十四間		六丁目橋	江戸時代幕府が架けた橋
毛長川	増田橋	石橋	九尺	二間	水神橋	
墨田川	千住大橋	木製	六十六間	二間一尺	千住大橋	江戸時代幕府が架けた橋

大正から平成年代に新設、又は廃止の橋（長さ・幅は竣工時のもの）

川名	橋名	造製	長さ	幅	竣工	備考
古利根川	寿橋	コンクリート	四一M	六M	大正十年	重ね橋から独立橋が生まれる
〃	ふれあい橋	〃	一〇四・七M	十六・八M	平成十一年九月	両側三・五M歩道
〃	須賀橋	〃	七三・八M	二・八M	大正十三年	大正十二年震災時建設中
元荒川	新宮前橋	〃	六三・九M	十六M	平成九年五月	
〃	新平和橋	〃	六九M	十八・五M	昭和四一年五月	
〃	しらこばと橋	〃	一四五・一M	十二・十五・五M	平成六年十二月	
〃	瓦曽根橋	土橋			不詳	昭和十三年九月大破
〃	平和橋	〃	三一M	二M	昭和二四年	昭和四一年十一月二三日破損
〃	平和橋	コンクリート	二三M	十三・五M	昭和四二年九月	瓦曽根橋・平和橋 位置変更
〃	不動橋	〃	六六M	三・五M	昭和三二年八月	
〃	荒川橋	板橋			昭和五年五月	賃取橋、後の中島橋
新方川	定使野橋	コンクリート	七一・八M	十六・八M	昭和六一年十一月	
〃	東橋	〃	四九・三M	十六・五M	昭和四五年三月	

荒川放水路（日光街道）明治末から昭和初期開削

荒川	千住新橋	鋼製	二五一間	三間	大正十三年	

千葉県・茨城県に向って渡る橋

江戸川	野田橋	木製	一八〇間	四間	昭和二年二月	
〃	玉葉橋	コンクリート	四一四・八M	十四・三M	昭和五九年三月	
利根川	目吹大橋	〃	五三五・九M	七M	昭和三三年十二月	

中川大正九年二月～昭和二年十月開削

中川	豊橋	コンクリート	四五・四五M	六・〇六M	大正十二年	
〃	旭橋	〃	四六M	四・二四M	〃	
〃	内谷橋	〃	四二・三六M	三・〇三M	〃	
〃	赤岩橋	〃	三八・七三M	三・〇三M	〃	
〃	弥生橋	〃	四五・四五M	四・八五M	〃	

旧増林村の人々が利用してきた橋

武蔵埼玉郡村史 明治九年一月一日現在

川名	橋名	造製	長さ	幅	現在の橋名	備考
新方川	定使野橋	土橋	六間三尺	九尺	宮野橋	江戸時代は地蔵堂前橋
〃	城野上橋	〃	〃	〃	鷹城橋	
〃	市道橋	〃	六間	〃	城野上橋	
〃	二子曽根橋	〃	六間三尺	〃	千代田橋	
〃	市道橋	〃	八間	〃	増森橋	
〃	新田橋	木製	〃	〃	新田橋	
〃	中台橋	土橋	〃	〃	昭和橋	
古利根川	重土橋	〃	十間	三間	大正十年廃止	水門と一体となっていた橋
逆川	猿島往来橋	〃	十三間	九尺	新方橋	
〃	前波橋	〃	九間三尺	〃		建設中
〃	高畑橋	〃	九間	六尺	しんど橋	東へ四十M移設
〃	地蔵橋	〃	八間	九尺	地蔵橋	
元荒川	大沢橋	木製	十八間	三間	大沢橋	
〃	天岳寺前橋	土橋	十二間三尺	二間	宮前橋	平成十二年廃棄
〃	溜井橋	〃	十二間	九尺	溜井橋	平成八年廃棄
〃	仮橋	木製	二十六間	七尺		不動様縁日一カ月間架け舟を横に並べた浮橋
中川	徳江橋	〃	八十五間	二間	吉川橋	賃取橋、徳江忠次郎が架けた

江戸に向って架かる橋、奥州街道（日光街道）道幅四間

新編武蔵風土記稿 文化文政年代

元荒川	境板橋	板橋	三十四間		大沢橋	
綾瀬川	大橋	土橋	十二間三尺	二間一尺	綾瀬橋	江戸時代幕府が架けた橋
伝右川	〃	板橋	十四間		六丁目橋	江戸時代幕府が架けた橋
毛長川	増田橋	石橋	九尺	二間	水神橋	
墨田川	千住大橋	木製	六十六間	二間一尺	千住大橋	江戸時代幕府が架けた橋

あとがき

私達の祖先となる古き時代の人々は旅人であった。

当地に住む人々の苗字の由来を調べてみるとその多くは戦国時代から徳川政権に係る年代に遠方から当地への旅人であった。先住民と融和し、やがて土着の民となっていった。

そして又、多くの寺院住職も行雲流水思想の概念に基づき一ヶ所に留まることなく旅人となり各地で広範囲に布教活動し、教義を広めることに務めたことであろう。

時代は過ぎ、当地に住みついた人々は、社会の安定に伴ない経済的にゆとりもでき旅人となり、各地に見参して歩くようになった。

そして人々の移動と供に造られて来た橋。橋はその時代の権力者や社会要因によって名称が変更されたり、位置さえも変えられてしまうことがありました。歴史の事実を残すべく今あらためて橋を考察してみました。

古き時代の人々の旅の話そして橋、この小史を見て真の古き時代が甦ればと念じております。

参考と引用書籍・文献

歴史発見 12	角川書店
旧増林村の石仏めぐり	加藤幸一著
故事名刹百科辞典	新人物往来社
仙台市史　近世Ⅰ	
植村直巳冒険学校	文芸春秋社
角川地名辞典	
庄内古川三悪水路工事概要	
日本国史大事典	
新編武蔵風土記稿	
武蔵埼玉郡村史	

増林からの旅路
2001
増林の歴史を考える
其のⅢ

発行日　平成13年12月20日
発行者　山本泰秀
連絡先　越谷市増林2-494